



平成21年12月14日

卓話『アメリカという国』

日本プロフェッショナル野球組織 コミッショナー
三菱商事株式会社 取締役

加藤 良三 様

こんにちは。加藤でございます。

私のアメリカについての感想、二つございます。一つはアメリカは神話の故郷のない国であるということ。多くの国は神話の故郷を持っていますが、アメリカはそうではありません。それだけに現在価値で生きる国です。自分たちがいかに立派なことをするかに価値がある。それは現実の問題の解決に向かうエネルギーを意味します。問題解決能力、これがアメリカの特質の一つです。

第二はアメリカは二軸型の国であるということ。日本もヨーロッパの多くの国も一つの権威を頂点として秩序が積み上がることで安心を感じる国ですが、アメリカは中心が二つないと収まらない。政党でいえば共和党と民主党。アメリカほどの多様性を持った国ならイタリア以上の少数、乱立になってもおかしくないのに、なぜか二つに収斂する。逆に言うところ共和党と民主党であらゆる問題について自分たちの立場を打出さなければならぬという無理を背負った国。その中で一番重要と思われる問題で国民の多数が受け入れる政策を出した方が勝ち。だから共和党と民主党は時代の要請によって政策が入れ替わる。神話の故郷を持たないが故に、国民全体を結びつける絆は人権の尊重だという強烈な哲学も生まれてくる。人権への思い入れは、共和、民主の別なく強烈です。アメリカは結局リスクを取る国です。リスクというのは最終的には人命。第一次大戦以降、アメリカほど多くの戦争に関わり続けた国はありません。これはアメリカ流の、こうしなければ問題解決でき

ないと考えた結果だと思えます。

日本にとって隣国外交は大事です。隣国とうまくやれない国は国際的評価が低い。中国、韓国との関係が2国間だけで解決できるというのは幻想です。日本と中国、日本と韓国の問題をマネージしていくには第三国との関係が決定的に重要になります。日本の場合、そういう存在として選んだのがアメリカ。問題解決能力を世界で一番持った国と同盟を組んでいることが日本の外交にどれくらいプラスに働いたか、冷静な分析が必要です。今、日米同盟が危惧されています。私は鳩山さんが対等性と言っておられるところには慎重な考慮が必要だと思います。アメリカにただノーと言うなら、それは対等じゃありません。アメリカと対等にというなら、もう少しリスクを取る覚悟が必要です。

日米同盟は世界の中ではやや異質です。伝統的な同盟は相互防衛が基盤。日本の場合、その部分が曖昧なものですから、政府も民間も、アメリカとの関係で何となく遠慮せざるを得ない。日米関係が普天間の問題ですぐ壊れることはないと思いますが、なんだかんだ言っているうちに、掛け替えのない同盟国から掛け替えのある同盟国に格付けが下がっていたというのでは、日本の痛みは激しい。それが今の日本とアメリカの関係の問題だと思います。ありがとうございました。

